

「遊びの絵」(ぬたくり遊び)の市内保育園との連携による事例研究

A Case Study of "Daubing" as an Activity for Young Children ~in Concert with Day Nurseries in Tsuyama City ~

森本 太郎

Taro Morimoto

1. 本論の目的

本論は、地域の教育活動と本学での教育内容が有機的にかみ合い、両者にとってよりよい実践となる可能性について、実際に造形活動を行う中で事例研究をするものである。

ここでは、市内保育園の協力を得ながら、3,4歳児を対象に線描き遊びや絵の具遊びのような材料経験を通して「心の解放」をねらいとした活動を行う。具体的には、保育室全面を「遊びの絵」の場として設定し、のり絵の具を用いて手や指を存分に使って描画活動を行う。

幼児にとってこのような活動は、テクニックを要することなく感情のおもむくまま直接挑むことのできるものである。しかし、大規模に行おうとすればそれなりに準備、後片付けに人出がかかり、忙しい保育の現場ではそう頻繁には行えないのが現状である。今回の実践は、保育園の側のような思いを受け止めながら、本学学生にとっても実際の現場で幼児とふれあう中で、現場に入ることではか見えてこない新たな気づきや学びについて認識し、今後の学習活動に繋げていこうというものである。

また、その中で今回題材として選択したより良い「遊びの絵」の実践のあり方について、環境構成、描画の基底材、絵の具、用具等についての知見を得たいと考えている。

2. 「遊びの絵」について

ここでは、活動のねらいをよりはっきりさせるために、幼児画を「遊びの絵」、「生活画」、「お話の絵」、「観察画」と四つの柱に分けて考えてみたい。¹⁾

生活画とは、自分生活経験を描く絵であり、それに対する記憶がもととなる。お話の絵は、自分が見聞きしたり、保育者からの読み聞かせなどをもとに想像して描く絵である。観察画とは、目の前の対象を直接見て描く絵であり、認識力や知覚力が中心となる。

「遊びの絵」というのは、上記のような描画活動とは異なり、絵の具やクレヨンなどの材料経験を媒介としながら“心の解放”を目的とした活動である。「遊びの絵」、中でもフィンガーペインティングの実践については、1931年にミス・シヨウ(Ruth Faison Shaw/1888-1969)がローマで試みて以来、多くの園で行われるようになった。フィンガーペインティングというのは、絵の具にのりを混ぜ、それに粉石けんなどを配合して指絵の具を作り、それを模造紙やカレンダーなどに用いられているコート紙など摩擦の少ない紙の上で、両手、全身を使ってこね回して遊ぶものである。

この活動は、子ども達の表現が型にはまった萎縮したものになった場合や、表現に自信を失ってしまった場合、また入園当初の心身の緊張が強い場合などにも活用されることが多い。

日本でも戦後、多くの園で優れた実践がなされ、保育内容表現の主要なテキストには表現の一形態として紹介されている。

3. 活動の内容

実践に協力していただく園として、以前保育士養成協議会表現委員会の中で講話をいただいたことのある、津山市内の福岡保育園をお願いすることにした。8月3日に園に伺い、「遊びの絵」の実践をさせていただくことを依頼した。そして園の先生方と協議する中で、園児の発達段階、過去の表現分野の体験の蓄積などを勘案し、3,4歳児を対象に実践をさせていただくこととなった。

実践に用いる絵の具についてだが、市販の指絵の具で、例えばある会社のものは650ミリリットル入りの単色のボトルで¥1.365と、かなり高価で、潤沢に使用するには適さないことが分かっている。また、以前私がボランティアとして参加した「ぬたくり遊び」の活動では、ターナー社のイベントカラーに市販のでんぷんのりを混ぜたものを使用していた。この方法だと、比較的安価に大量ののり絵の具を作ることができる。しかし、イベントカラー自身の定着力が強いため、活動後に衣服や皮膚についた絵の具を落とすのに苦労する、という欠点があった。

今回、指絵の具としては保育園のアドバイスもいただきながら安全性、価格、準備する量といった観点から、小麦粉を水で溶いたものを鍋で炊き込み、ゲル状になったものに食紅で着色したものを使用することとした。また、併せて小麦粉に対する対象園児のアレルギーの有無についても確認を取った。

実践の日程は、園児の体が絵の具まみれになることが予想されることから、活動後、園児の体に付着した絵の具を、衣服を脱いでから水道水で洗い落としてやっても抵抗の少ない夏期を中心に組むこととなった。

①第一回実践 8月26日(木)

対象 3.4歳児計22名

場所 保育園遊戯室

前日の25日の午後から学生1名と保育園に伺い、絵の具作りに取り組む。園の給湯室をお借りして小麦粉に加水しながら炊き込んでいった。炊き込んだ直後の絵の具は、かなり熱いため一晩さまし、活動の当日に食紅で着色することとした。また、活動後の絵の具の除去がより簡単になるよう、園のアドバイスで少量の粉石けんを絵の具の中に混ぜ込んだ。

当日、朝の会と外遊びの間の時間を利用して活動の場所作りを学生3名と共に8時30分から行う。遊戯室全面にブルーシートを敷き(12畳大のもの3枚)端を布テープで固定した。また、荷物なども極力棚の上などに移動し、活動の場所を確保した。新聞紙の上に模造紙をしき、室内に活動の場を島状に5カ所確保する。それぞれの場所に小分けしたのり絵の具を広口の容器(直径30センチ程度)に入れ、赤、青、黄、緑の4色準備することとする。これらの4色に限定した理由は、それぞれの絵の具どうしが混ざり合っ、いろいろな色調が生まれることを期待したからである。そのため、彩度が著しく低下する黒や灰色は準備していない。

担任の先生から紹介をうけた後、簡単に自己紹介をしてから実際にのり絵の具を用いて紙の上で実演を試みる。園児の興味を高めるため、食紅を混合する色作りをその場で行い、色に変化する様子を観察してもらう。色作りの実演中も子どもたちは早く参加したくてうずうずしている様子である。その後、活動に移ったのだが、園児たちは、全く抵抗無く次々と参加し始めた。



園児は最初描画活動に取りかかる以前に、ひんやりとした指絵の具の感触を、あたかも足湯の中に足を入れているごとくに楽しみ、そうした後に紙の上に手を滑らせた。そして、自分の手の軌跡が色の帯となって出現する様を大いに楽しんでいった。次に色の帯の中に自分の指を入れ、稲妻模様や雨のような点々を描いたりしていろいろと試行活動が続いた。

約 30 分活動を行い、十分に満足した園児からテラスに移動し、衣服を脱がせてから水道水と手ぬぐいを使って体を洗ってやる。その後、着替えてから次の活動へ移行する。

準備、後片付けを含めて約 2 時間 30 分で活動を終了する。



②第二回実践 9月8日(水)

対象 3.4 歳児計 22 名

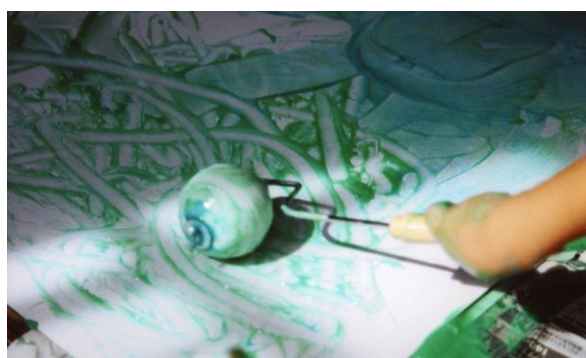
場所 保育園遊戯室

前回の実践の反省点を踏まえて、第 2 回目の実践を実施した。今回も、前日の 7 日午後から学生 1 名と園に伺い、絵の具作りを行う。実践当日の

8 日は、前回の反省点を生かし描画の基底材の材質とレイアウトの変更を行った。

今回は、前回のように島状に描画スペースを設けるのではなく、描画スペースを帯状の連続したものとし、好きな場所で連続して描画が行えるようにした。また、基底材である紙の材料も薄い模造紙から厚みのある白ボール紙に変更した。

また、前回と同じ描画方法では飽きがきているのではないかと予想し、球状のマジカルローラーや、固さの異なる 2 種類のローラーも描画材料として準備した。



今回も活動後、テラスに出て汚れた衣服を脱ぎ、体を洗ってから着替えを実施する。活動時間は、準備後片付けを含め、2 時間 30 分程であった。

4. 考察とまとめ

今回、短い実践ではあったが多くのことが明らかになった。それらを第一回実践と第二回実践とに分けてまとめてみたい。

①第一回実践について

○改善を要する点

- ・描画の際に設定した基底材の模造紙が、絵の具の水分により、破れてしまうことがあった。
また、掃除の手間を省くために模造紙の下にひいた新聞紙も水でクシャクシャになってしまい、不要であった。
- ・島状に5カ所の描画スペースを確保したが、それだけでは収まりきらずに、もっと大きく描きたいという園児がいた。
- ・活動の前後の担任の先生との役割分担があいまいであった。
- ・担任の先生との片付けの打ち合わせが不十分であったため、事後の用具の片付けの段階で衛生面での配慮が少し足りなかった。

○良かった点

- ・指絵の具の量や容器の配置はおおむね適切であった。
- ・学生や教員も含めて、園児への声かけや一緒に楽しむという姿勢を持つことができた。
- ・伸び伸びと全身を使って描画活動に取り組めた。

②第2回実践について

○改善を要する点

- ・前回に続いて、同じようなフィンガーペインティングの実践では飽きが来るだろうという予測のもと導入したローラーであったが、3,4歳という年齢では、より直接的に描ける指の方を好む園児が多かった。つまり、ローラーなどによる、指とは違う形象の味わいよりも直接的な操作を好む者が多かった。

○良かった点

- ・今回用いた白ボール紙は厚みがあり、前回の模造紙のように破れることはなかった。
- ・白ボール紙表面の適度な摩擦のため、ストレス無く表現行為に没頭できていた。
- ・担任の先生との連携がスムーズにいった。

- ・活動後の撤収の見通しがつき、人員の配置や活動について段取りよくできた。

③全体を通して

今回の実践は、市内保育園と連携して「遊びの絵」のより良い方法について事例研究するものである。この実践を通して、改めて全身を使って伸び伸びと描画活動をする心地よさ、楽しさを、園児の活動時の表情を通して再確認することができた。園の先生からも、いつもは引っ込み思案の子もお絵かきに没頭していた、とのお言葉をいただくことができた。

また、継続的に子どもと関わっていくことの重要性も明らかになった。いかに良い実践であっても、子どもとの信頼関係が薄い状態でスポット的に指導を行ったとしても、子どもの緊張が強く、なかなか良い実践は行いにくい。今回の実践でも、1回目は少し緊張感を持った子どもの姿があった。しかし、2回目の実践では、緊張感も解けよりスムーズに実践ができたのではないかと考えている。

今回、実践をさせていただいた園は教育実習などを通して本学ともなじみのある園であった。だからこそ、幸いにして今回のような少ない打ち合わせの中、充実した実践ができたのではないかと考えている。

本来教育計画というものは、園児のそれぞれの実態がまずあって、その上で個々の育ちに資するように立案していくものである。大学と市内の園とが連携した上での造形活動の実践に際しては、事前に両者による園児の実態に沿った教育目標の設定が今後は必要であると感じた。

今回のケースは、「遊びの絵」についての現場の状況を実際の保育の場の観点から観察し、そのより良い実践方法を構築してみたい、との私たちの強い思いがあった。いろいろと打ち合わせをさせていただいたが、結果的にこちらの思いがやや先行してしまい、園からの要望を汲み取り切れなかったのではないかと、という思いもある。

今回の実践に参加した学生達にとって、それぞれ実際の保育の場での子ども達を前にして、大学の講義からだけではわからない彼らの行動や表情などをそれぞれ学んだ意義は大きいだろう。想定外の事象に対して臨機に対応していくことの必要性など、現場からしか見えてこないことは数多く存在する。また、表現活動に際して子どもの動きを予想した周到な準備や、活動後の片付けの段取りなど、幼稚園教育要領、保育所保育指針などには載っていないスキルも数多く存在する。教員にとっても、園と連絡を密に取りつつ、互いに高めあっていける方策について考えていくことは非常に大切である。また、理論と実践の擦り合わせができた点でもたいへん有り難かった。同じ地域に存在する学校や園が知恵を出し合い、地域の教育力を高めていくことは、ひいては地域の活性化にもつながると考えている。

注および参考文献

- 1) ここでの分類は、林健三、黒川健一、福井昭雄編 著
「絵画制作・造形」東京書籍 1986 による。
- 2) V. ローウェンフェルド「美術による人間形成」
竹内清、堀内敏、武井勝雄訳 黎明書房 1963
- 3) 黒川健一、高杉自子編 保育講座・保育内容表現
ミネルヴァ書房 1990
- 4) 川村善之「美術教育の評価」 日本文教出版 1986